

衆国海軍兵学校 (United States Naval Academy) を見学した。海軍兵学校は、アメリカの陸軍士官学校と異なり、1868年7月27日の米国会の両院合同決議により、五名の日本人留学生を海軍兵学校生徒として受け入れた。使節団一行がワシントンに滞在した時、米紙のDaily National Republicanは、5月14日付の記事で皇族の有栖川宮威仁親王 (1862-1913) の海軍兵学校の入学式を報道した^[40]。West Pointにあるアメリカ合衆国陸軍士官 (United States Military Academy) を視察したことは6月12日付のNew York Timesによって報道された。その日、一行は、まず船着場で士官学校校長及び部下の歓迎を受け、軍の管轄区域に入ると五門の大砲による礼砲を受け、アメリカ陸軍長官のWilliam W. Belknap (1829-1890) の案内を受け、校内見学を行った。一行は昼食後、午後3時から5時までの閲兵式に臨んだ。閲兵式上の日本人一行に対して、「大勢の婦人たちが見事に居合わせていた。使節団一行にはハンカチを振り、まためざましい演習のために手袋をはめた手を叩いたりして、彼女たちの注意は、来訪者と生徒たちの間を行ったり来たりしていた^[41]」と同紙は面白く描いた。閲兵式終了後、地元の歓迎会において、「日本人各氏は英語がとても上手な、非常に礼儀正しい上品な紳士たちで、彼らはウェストポイントの花たる美しい女性たちに紹介され、この上なく美しい眺めと見事な歩きぶりを目にした。浅黒い肌をしたわれらが友人の何人かはなかなかの美男子で、態度も極めてりっぱであり、もし彼らがもうしばらく当地にとどまることにでもなれば、士官学校生徒た

ちにとっては非常に悩ましいことになろう。なぜならいつもは、彼らが一番の花形だからだ^[42]」と、アメリカ人女性に対する若い日本人使節が持ったオリエントの魅力を描いた。とりわけ、記事の文末において、「大使は、ルーガー将軍の指揮で行われる軽砲兵隊の演習を視察するが、彼はこのことに大きな関心を持っていると述べている。軍事、商業、機械工業に関して、日本人が大変目はしのぎよく観察者であることに疑問の余地はないが、反面彼らは自然の景色には大して気をとめていない。比類なきハドン川の大雄大な眺めも彼らには全く役に立たなかった^[43]」と、使節団の真面目な見学姿勢をイキイキと描いた。

7月18日付のThe Milwaukee Sentinelは、「Japan has become the Land of Surprises」という題名で、日本近代化における世界的意義と在日のアメリカの影響力を報道した。世界の日本の地位と価値について、「日本はすでに世界に対して喜ばせる国となった。パシフィック鉄道の完成、及び北米の西海岸とアジアの東海岸との間の蒸気船航路の設立は、すでに日本を世界交通の中心点になった。日本が相変わらず世界から隠遁することが出来なかったのである。最も教養のあるアジア人、たとえば日本人は変化する必要性を認めている^[44]」と強調した。また、アメリカの全般的影響力について、「彼らは開国を通じて世界との貿易をやっている。アメリカとヨーロッパとの通商条約を求めている。新たな教育制度が設けられた。貴族の若者たちがここに送られ、我々の大学の教育成果をたのしんでいるが、我々の斬新な文明の趣旨を受